韓国人学習者の日本語の丁寧表現に見られる韻律的特徴

洪　　珉　杓

1　はじめに

日本語教育においては最近、外国人日本語学習者の発話の韻律について関心が高まっており、日本語音声との対照研究により学習者の母語別の韻律的特徴が明らかになりつつある。これは韻律（prosody）を構成するアクセント、イントネーション、リズム、ポーズをはじめ、声の高さ、速さ、強さなどの諸要素がコミュニケーションの上で重要な役割を果たしているため、このような韻律的特徴が欠けているとコミュニケーションの上でさまざまな支障を招くからであろう。さらには、それがコミュニケーション上の何らかの誤解やトラブルの原因になる可能性もある。大坪（1990）はこういった誤解を与える実例として「韓国語話者の中には、日本語を話すときに、非常に強い気音を伴う閉鎖音を使う人がいる。例えば、「こんにちは」という時、最初の子音［k］の後に強い息の続く発音である。これは、日本人には強調形であると感じられる。ある文派の中では、非常に興奮して話しているように聞こえる。これは日本人にはずいぶん感情的な人という印象を与える結果となる」ことを挙げ、これは情のレベルで日本人に誤解を与えるよい例であると述べている(1)。このように、外国語話者の日本語発話においては、発音の仕方やイントネーションなどの不自然さによって、無意識のうちに相手に不快な思いをさせることが多いようである。特に、韻律的特徴により話し手の丁寧さの程度が微妙に表される丁寧表現は外国人にとって最も難しい言語行動の一つである。その難しさとは、どういう場面でどういう敬語表現を使うかという敬語選択の難しさとともに、いかに発話するかという点にもかかわるのではないかと考えられる。

そこで、本稿では日本語音声の丁寧さについて聴取実験を行ない、日本語社会ではどういう話し方が丁寧とされているか、また韓国人学習者の丁寧な発話を日本人がどう聞き、どう評価するかについて三つの発話文を用いて考察する。そのうえで、聴取実験に用いられた韓国人学習者の発話の韻律（ピッチ曲線）を抽出して日本語話者の発話の韻律と比較し、そこから韓国人学習者の日本語の丁寧表現に見られる韻律的特徴を記述する。

さらに、韓国人学習者の日本語の丁寧な発話における不自然さの原因についても母語の韻律の干渉の側面から解明を試みる。

2　聴取実験

2.1　実験の概要

意識調査[2]の結果から得られた各表現別に丁寧度の極端に違う二つの場面（丁寧度の最も高い場面と丁寧度の最も低い場面）を取り上げ、それぞれの場面で同一の発話文を日本人大学生と韓国人の日本語学習者に発話してもらい、それを判定者に聞かせて一つ一つの発話に対して音声の丁寧度を判断してもらう。つまり、韓国人学習者が丁寧さを込めて発話した日本語音声が、どの程度日本語話者に意図どおり伝達されるかを韓国人学習者に対する日本語の敬語教育の立場から調べる。

発話文の録音は1990年７月に行ない、実験は韓国では1990年９月に、日本では1990年10月にそれぞれ実行した。

2.2　発話者

発話者の構成は男女同数にして、日本人６人（男３人、女３人）、韓国人６人（男３人、女３人）に発話してもらった。日本人発話者（以下、日本人と呼ぶ）は全員筑波大学の学生であり、韓国人発話者（以下、韓国人と呼ぶ）はすべて韓国の大学で日本語を専攻して、現在日本で勉強している留学生で、日本語学習歴が４年以上とかなり進んだ学習者である。日本滞在期間は約８カ月から３年である。発話者のプロフィールは表１のようになっている。

2.3　発話文

聴取実験の刺激音声は(1)感謝の表現として「ドウモ、アリガトウゴザイマシタ」(2)謝罪の表現として「ドウモ、スミマセン」(3)挨拶表現として「オハヨウゴザイマス」の三つの発話文を用いた。この三つの発話文を意識調査の結果から得られた各表現別に丁寧度の最も高い場面（これを「A 場面」と呼ぶ）と丁寧度の最も低い場面（これを「B 場面」と呼ぶ）での音声でそれぞれ録音した。場面の内容は次のようになっている。

［１］　感謝の表現「ドウモ、アリガトウゴザイマシタ」

「A 場面」

電話ボックスに自分の手帳を置き忘れて出たところ、次に待っていた年上の人が追いかけて持ってきてくれた時

「B 場面」

役場で申請した書類を受け取る時

［２］　謝罪の表現「ドウモ、スミマセン」

「A 場面」

親しい年上の異性から借りた貴重な本を無くした時

「B 場面」

食堂などでお金を払う時、自分の間違いでレジからお金が足りないと言われた時

［3］ 挨拶表現「オハヨウゴザイマス」

「A場面」

朝、駅で昔の恩師に偶然に会った時

「B場面」

朝、自分にとってあまり親しくない同年輩くらいの同性に会った時

録音に当たっては発話者に上に示したような場面に居合わせたことを想定してもらい、研究の目的から考えてA場面では最も丁寧な音声で、B場面ではあまり丁寧さを込めない音声でそれぞれ発話してもらった。もちろん、こういう人為的な状況は発話者にとって不自然な行為を促すことになると思われるが、現実的に同一の身体的、心理的状況で数人の比較可能な同一の発話を録音することは不可能だと判断して、このような方法を取ることにした(3)。このようにして得られた音声資料は全て計算機に入力して音声テープを作成した。テープ作成にあたっては日本人の音声と韓国人の音声、そしてA場面の音声とB場面の音声の区別なしにそれぞれの音声を2回ずつランダムに配列して音声番号144番（3表現×A・B 2場面×発話者12人×各2回）までの調査用テープを作成した。これを再生すると約17分くらいかかった。

2.4 実験方法

日本人大学生と韓国人の大学及び高校の日本語学習者で構成された判定者に一つ一つの音声を聞かせて、それぞれの音声が2.3に示したA・B二つの場面の中、どちらの場面での音声であるかを判断するように指示した。それで、もしA場面での音声で、丁寧に聞こえた場合は［A］、B場面での音声で、丁寧に聞こえない場合は［B］を書いてもらった。判定者の構成は表2のようになっている。

3 聴取実験の結果

表3は日本人大学生と韓国人大学生及び高校生の判定者に全144回の音声を聞かせて、それぞれの音声がA・Bどちらの音声であるかを判断してもらった結果（正解率）である。ここでは、特に韓国人学習者の丁寧な発話に注目して、どのように判定されたかを判定者のグループ別に観察してみる。

まず、日本人大学生は日本人の丁寧な発話をだいたい丁寧だと判定したのに対し、韓国人の丁寧な発話は半分以上を丁寧でないと判定した。これを表現別にみると、感謝の表現で日本人大学生は、日本人の丁寧な発話を91.3%が丁寧だと判定したが、韓国人の丁寧な発話は45.7%だけを丁寧だと判定した。残り54.3%の発話は発話者の意図とは違い、丁寧でないと判定された。次に、謝罪表現のA場面の音声に対する判定結果をみると、日本人の丁寧な発話は82.3%が丁寧だと判定されたが、韓国人の丁寧な発話は49.5%だけが丁寧だと判定された。表現(3)の挨拶表現の場合でも、同様の結果になっ

た。

しかし、韓国人の丁寧な発話に対する韓国人大学生及び高校生の判定結果をみると、日本人大学生より丁寧だと判定した割合（正解率）が全て高い結果になった。これは韓国人の発話者、判定者ともに母語の韓国語の韻律にかなり影響を受けていることを示唆している。

次に、B場面の音声、即ち、丁寧でない音声の判定結果であるが、これは日本人大学生と韓国人大学生及び高校生を問わず、かなりの正解率を見せている。この結果からみると、丁寧さの程度は声の調子だけでもある程度はわかるようである。

以上のように、音声の丁寧さに関する聴取実験の結果、韓国人学習者が丁寧に発話した日本語音声がnative speakerの日本人大学生に丁寧だと判定された割合が低い結果になったが、その原因はどこにあるのであろうか。それを解明するために、日韓両国人の丁寧な発話の韻律を抽出して、それを比較しながら検討してみる。即ち、最後に添付した図1～図3に示したピッチ曲線を見ながら、日本人の丁寧な発話の韻律に比べて韓国人の丁寧な発話にはどのような韻律的特徴があるかを観察してみる。また、母語の韻律の干渉を確認するために、三種類の発話文を韓国語に訳してその翻訳文を同一の韓国人発話者に発話してもらい、韓国人の日本語音声と韓国人の韓国語音声の発話の韻律を比較する。

4　韓国人学習者の丁寧な発話の韻律的特徴

韻律的特徴を記述するに当たっては、韻律の細かいところに注目するよりは、native speakerである日本人の丁寧な発話の韻律（ピッチ曲線）に比べて韓国人学習者の日本語の丁寧な発話に見られる韻律的特徴の全体的な傾向を概観することに重点を置く。

音声の分析には、東京大学の今川博・桐谷滋両氏開発のパソコン高速音声信号処理プログラム「音声録聞見Ｖ４」を用いており、その結果は図1～図3に示した。韓国人学習者の丁寧な発話に見られる韻律的特徴をまとめると次のようになる。

(1)　日本人に比べてピッチが低い。

韻律におけるピッチの変動は最も重要な要素の一つであると言われているが、外国人にとって適切なピッチを使って発話するのはそれほど容易なことではない。

日本人発話者のピッチを測定してみたところ、丁寧な発話のピッチが丁寧でない発話のピッチより男女とも約1.23倍高い結果になった。このような高いピッチにより丁寧さを強調することはよく知られていることであり、特に、日本人女性によく見られる傾向である[4]。しかし、韓国人のピッチは丁寧な発話においても、あまり高くならない（男性1.07倍、女性1.02倍）。筆者の終験からみると韓国語社会では高い音声よりは、むしろ低い音声が丁寧とされているように思われる。このようなことからみると丁寧さを表現する声の高さも、その社会によってある程度決まっているように考えられる。

(2)　日本人に比べて、発話の持続時間が短い。

程度の差はあるものの、日本人と韓国人を問わず、丁寧な発話になると発話の持続時

間が長くなる（日本人：約1.32倍、韓国人：約1.14倍）傾向が見られる[5]。このようにゆっくり発話することにより丁寧さを表すのはユニバーサルな現象ではないかと考えられるが、問題はどのくらいゆっくり発話すればよいかである。例えば、発話の時間が長くなりすぎるとむしろ不自然な発話になることもあるから、適当なスピードで話すのがよかろう。今回の結果からみると、丁寧さを効果的に伝えるためには、韓国人はもっとゆっくり発話する必要があるだろう。

(3) ピッチ曲線が単調である。

日本人のピッチ曲線は上下の変化がはっきり見え、全体的に安定しているが、韓国人学習者のピッチ曲線は上下の変動が少なく単調である[6]。これは、「日本語のアクセントは高低アクセントで、韓国語のアクセントは非示差的である」[7]という両言語のアクセント体系の相違の影響である可能性がある。ただし、KM_3の場合は韓国の慶尚南道出身であるが、彼のピッチ曲線は確かに他の韓国人発話者に比べて高低変化がはっきり見え、日本人のピッチ曲線に似ていることが分かる。これは韓国語の中でも「慶尚道方言は、日本語のように声の高さによって表される高低アクセントである」[8]ということの影響ではないかと推測される。

(4) 日本人は丁寧に発話すると語尾を下げる傾向があるが、韓国人は語尾を少し上げるか平坦調の発話が多い。

文末イントネーションは発話者の心的態度や聞き手に対する丁寧さの程度が微妙に現われるので、丁寧表現の結果に大きな影響を及ぼすと考えられる。図１～図３の日本人発話の文末イントネーションをみるとすべて下降調を見せているが、韓国人の発話には語尾を少し上げるか平坦調の発話が多い。特に、女性の発話に多く見られるが、これも韓国語の韻律の影響ではないかと考えられる。ただし、丁寧さを表す文末イントネーションは発話文ごとに違いがあって、下降調が丁寧か、上昇調が丁寧かは一概には言えないが、この論文で用いた三つの発話文に限ってはすべて下降調が丁寧だと判断される。

(5) 感謝の表現と謝罪の表現において「ドウモ」を「アリガトウゴザイマシタ」や「スチマセン」より高く発話する人が多い。

これは日本人の発話にも見られることであるが、韓国人の発話にも「ドウモ」を「アリガトウゴザイマシタ」や「スミマセン」より高く発話するか、同じくらいの高さで発話する傾向がある。その例として、感謝の表現のKM_2の発話、謝罪表現のJM_2、KM_2の発話などが挙げられるが、これらの発話についてはほとんど丁寧でないと判定された。

(6) 母語の韓国語の韻律の干渉をかなり受けている。

2.5で述べたとおり、韓国人の日本語の丁寧な発話は日本人に不自然に、あるいは丁寧でない音声に関こえることが多かった。その原因はどこにあるのか。その原因を解明するための一つの試みとして日本語の発話文を韓国語に翻訳して、同一の場面で同一の韓国人発話者に発話してもらい、それを録音して「音声録聞見」にかけて分析を行なった。その結果、韓国人学習者の日本語の丁寧な発話は韓国語の発話文のピッチ曲線にか

なり似ていることが分かった。特に、発話者の心的態度が微妙に反映される発話の初めと終わりの部分がよく似ており、男性より女性の発話は韓国語音声のピッチ曲線に酷似している。

この結果から次の二点について解明ができた。一つは韓国人は韓国語の丁寧な韻律で日本語を発話したので、日本人が聞くには不自然に、あるいは丁寧でない音声に聞こえたことである。もう一つは、聴取実験の結果（表３）で分かったことであるが、韓国人学習者の丁寧な発話については日本人大学生より韓国人大学生及び高校生の正解率が高かったことである。これも同じ韓国語話者であるためであろう。

5　終わりに

日本語の運用における丁寧さを表現する行為は総合的な能力が必要である。つまり、語彙の適切さ、文法的な形の適切さ、音声面の適切さ、身振りなどの非言語表現の適切さなど、あらゆる意味での能力が必要と考えられる。例えば、日本語社会ではどういう話し方が丁寧とされているか分からなければ、単に丁寧な言葉や語法を知っていても丁寧さを満足に伝えることは難しい。さらには、互いに誠意を持っているつもりでありながら様々な誤解やトラブルが起きてしまうこともある。

そこで、本稿では主に音声の丁寧さを取り上げ、聴取実験や音声の分析を通じて、日本人の丁寧な話し方の特徴と韓国人学習者における日本語の丁寧な発話の特徴について分析を行なった。その結果、日本人は丁寧にいう時は声の調子を少し高くして、ゆっくり発話することが確認された。また、韓国人学習者の発話においては日本語の学習歴が長い学習者でさえも、母語の韓国語の韻律の干渉をかなり受けていることが明らかになった。

現状では、日本語教育の現場において韻律の教育はあまりなされていないようであるが、日本語教育の目的が学習者に日本人との円滑なコミュニケーションの能力を与えることであるならば、これからはこのような韻律面での教育も行なう必要があると考えられる。本調査の結果がその一助となれば幸いである。

注 1　大坪一夫（1990）27ページ。

2　意識調査は1990年５月に筑波大学の学生を対象に行なったもので、2.3で挙げた三つの発話文を使うことが妥当な全32場面（表現(1)→12場面、表現(2)→11場面、表現(3)→９場面）を予め設定し、同じことばでも場面や相手に応じてどのくらいの丁寧な音声で言うと思うかを１～４までの数字で書いてもらった。その結果に基づいて場面の丁寧さの順位を決めたが、本稿では紙面の都合により、その順位から発話文別に丁寧度の最も高い場面と最も低い場面だけを取り上げている。

3　これについては服部四郎（1964）、Edelsky（1979）などにも述べられている。

4　例えば、国広哲弥（1977）21ページ、Pike, K, L（1945）59ページなどに述べられている。

5　これについては荻野綱男・洪珉杓（1992）250～251ページや細田和雄他（1991）６ページにも同様の結果が述べられている。

6　谷口聡人（1990）63ページにも同様の結果が述べられているが、このような発話について谷口は「ややぶっきらぼうな印象を与える」と述べている。

7　閔光準（1990）304～306ページ。

8　同上　307ページ。

参考文献

1 鮎沢孝子（1990）「日本語学習者の発話における母語の韻律の干渉」『日本語音声研究報告３』
2 今川　博、桐谷　滋（1989）「DSP を用いたピッチ、フォルマント実時間抽出とその発音訓練への応用」『電子情報通信学会技術報告』SP89-36：pp. 17-34
3 大坪一夫（1990）、「音声教育の問題点」『講座日本語と日本語教育３、日本語の音声・音韻(下)』明治書院
4 大西雅雄（1943）『国語科学論考』修文社
5 荻野綱男・洪珉杓（1992）「日本語音声の丁寧さに関する研究」国広哲弥編『日本語イントネーションの実態と分析』文部省科学研究費報告書
6 国広哲弥（1977）「日本人の言語行動と非言語行動」『岩波講座日本語２　言語生活』岩波書店
7 谷口聡人（1990）「韓国語を母語とする学習者の韻律的傾向について」『日本語音声研究報告３』
8 服部四郎（1964）「言語の音声と意味」『国語学』56集
9 細田和雄他（1991）「日本語の韻律的意味の認知（英語話者による）とその音響的特徴」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究(3)』広島大学教育学部日本語教育学科
10 関光準（1990）「日本語と朝鮮語のアクセントとイントネーション」『講座日本語と日本語教育３日本語の音声・音韻（下）』明治書院
11 Edelsky, C. (1979) Question intonation and sex role. Language in Society 8. pp. 15-32
12 Loveday, Leo. (1981) Pitch. Politeness and Sexual Role: an Explanatory Investigation into the pitch Correlates of English and Japanese Politeness Formulae, Language and Speech, Vol. 24, Part 1, pp. 71-89
13 Pike, Kenneth. L. (1945) The Intonation of American English. The University of Michigan Press

付記：本稿は筑波大学大学院地域研究研究科に提出した修士論文（1991）を要約・訂正したものである。

（筑波大学大学院　文芸・言語研究科　応用言語学）

表１　　発話者のプロフィール

国別	発話者	性別	年齢	母語	出身地
日本人	JM_1	男	19	日本語	愛知県
	JM_2	男	20	日本語	栃木県
	JM_3	男	19	日本語	栃木県
	JF_1	女	22	日本語	神奈川県
	JF_2	女	20	日本語	徳島県
	JF_3	女	20	日本語	群馬県
韓国人	KM_1	男	34	韓国語	ソウル市
	KM_2	男	28	韓国語	ソウル市
	KM_3	男	29	韓国語	慶尚南道
	KF_1	女	32	韓国語	ソウル市
	KF_2	女	30	韓国語	ソウル市
	KF_3	女	29	韓国語	ソウル市

表 2　　聴取実験の判定者の構成

		判定者人数	性別構成		平均年齢
			男　子	女　子	
日本人大学生		101人	37人 (36.6%)	64人 (63.4%)	20.5歳
韓国人	高校生	159人	159人 (100%)		17.7歳
	大学生	151人	35人 (23.2%)	116人 (76.8%)	22.2歳
合　計		411人	231人 (74.3%)	180人 (57.9%)	

表 3　　日本人と韓国人の発話に対する判定者グループ別の正解率（%）

発話文		(1)ドウモ、アリガトウゴザイマシタ				(2)ドウモ、スミマセン				(3)オハヨウゴザイマス				平均値			
発話者 (人数)		日本人 (N=6)		韓国人 (N=6)		日本人 (N=6)		韓国人 (N=6)		日本人 (N=6)		韓国人 (N=6)		日本人 (N=6)		韓国人 (N=6)	
場面別		A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
判定者	日本人大学生 (N=101)	91.3	74.5	45.7	88.5	82.3	91.8	49.5	80.5	88.0	78.5	40.5	91.8	87.2	81.6	45.2	86.9
	韓国人大学生 (N=151)	81.1	84.5	62.5	72.2	56.5	79.6	74.5	55.1	79.3	80.1	62.1	66.2	72.3	81.4	66.4	64.5
	韓国人高校生 (N=159)	71.2	77.6	55.3	70.7	54.3	73.6	67.5	58.1	81.0	74.2	52.7	72.0	68.8	75.1	58.5	66.9

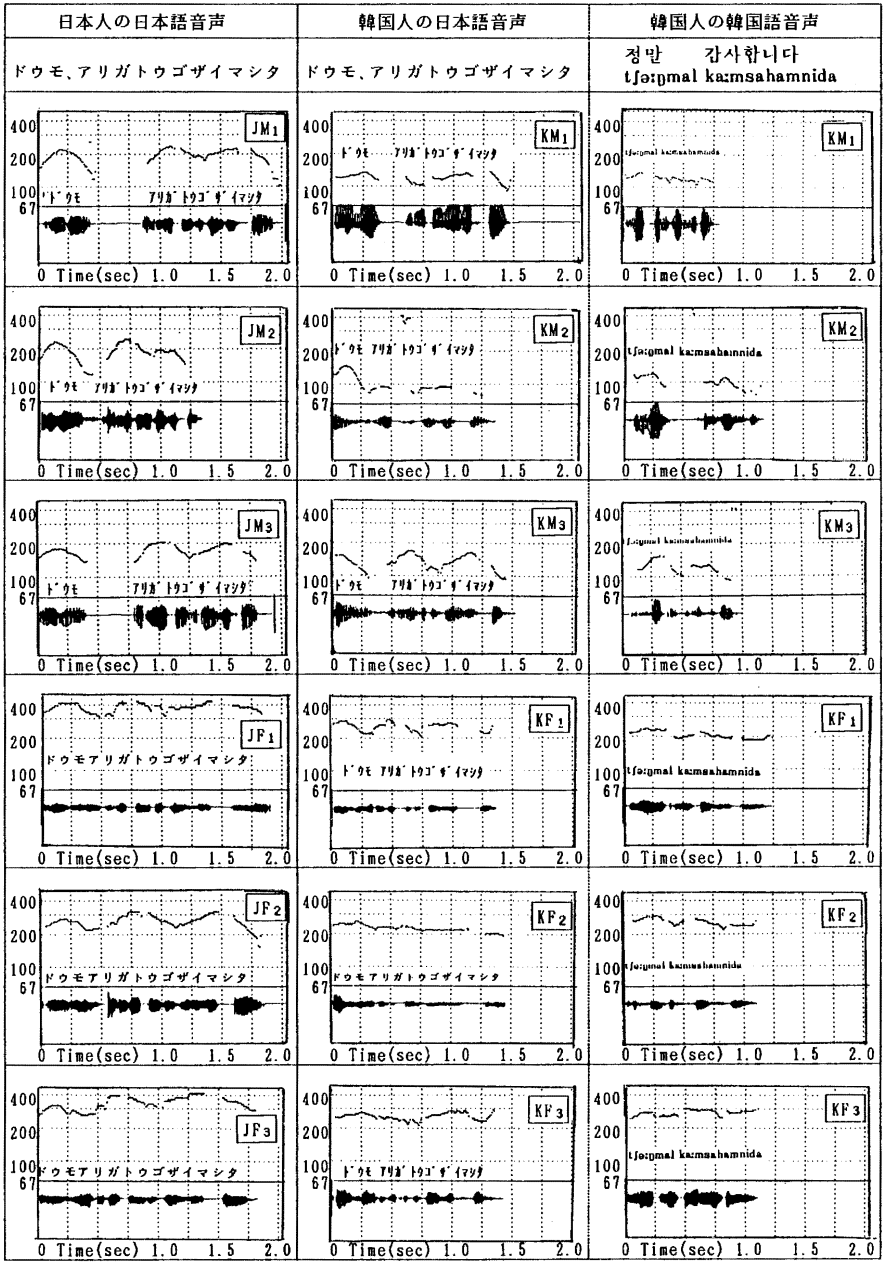

図1　感謝の表現の日本語音声と韓国語音声の男女ピッチ曲線

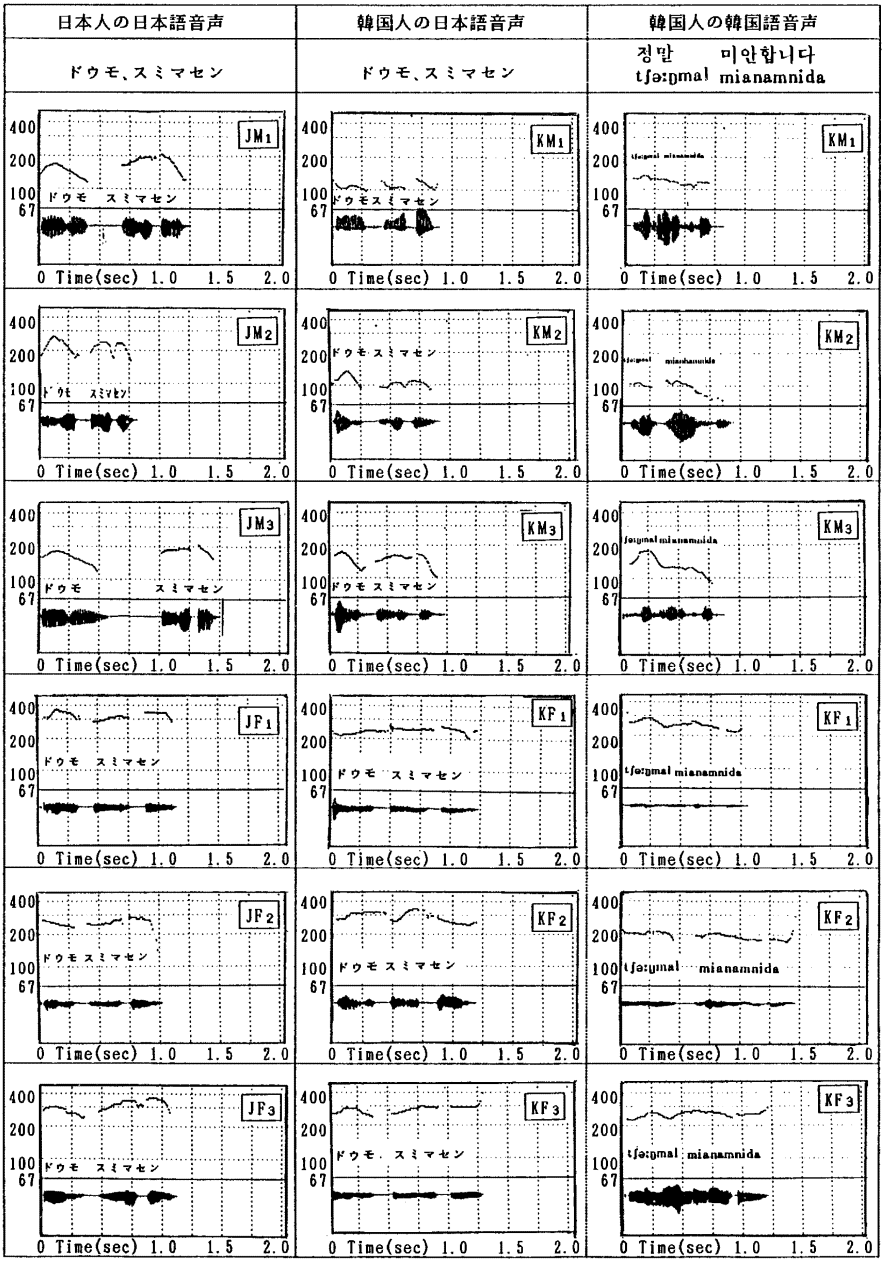

図2　謝罪の表現の日本語音声と韓国語音声の男女ピッチ曲線

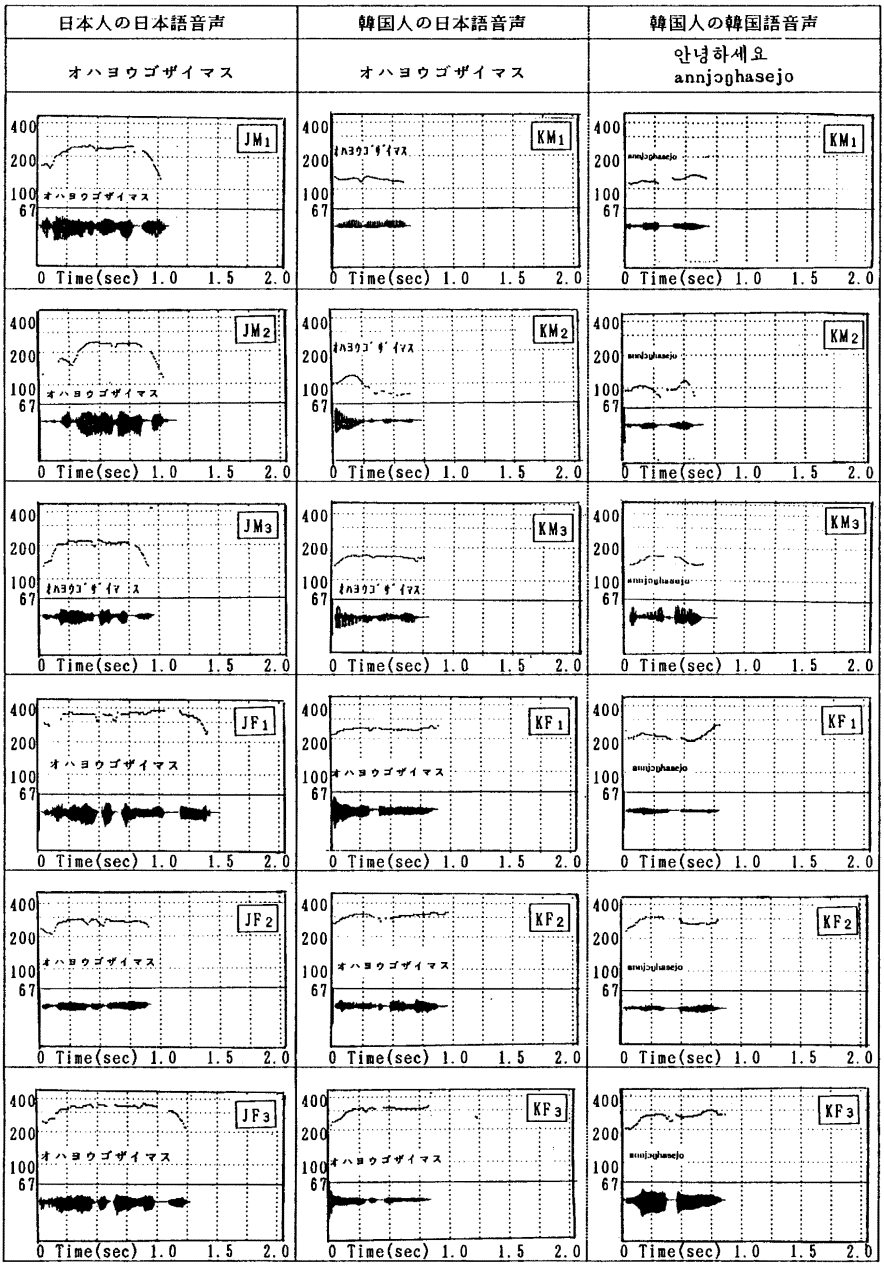

図3　挨拶表現の日本語音声と韓国語音声の男女ピッチ曲線